議会を観ての生の声

3月定例会の傍聴者数のべ44人、ライブ配信再生回数929回　録画配信再生回数100回（4/27時点）

新年度の取り組みを楽しみにしています

高本　梢（こずえ）さん
（錦野）

3月15日、文教厚生常任委員会主催の、歴史文化に関する意見交換会に参加する機会を得たことがキッカケで、議会傍聴にいきました。

以前友人が、大津町にも歴史文化保護協会が必要ではないかと、奔走していたので、どのような質疑応答が聴けるのか楽しみに行きました。

地域から指定文化財に関する申請・届出する際のルールの必要性や、指定基準を定めるべきではとの質問に、町の条例に従ってと言う言葉の答弁に、私は町にどのような条例があるのかも知らず、傍聴に来たことを反省しました。

文化財保護協会の必要性に対しては、官民一体となって取り組む方向性が示されましたので、この件で奔走してきた友人は、大きな、大きな一歩だと喜んでいました。私も新年度どのような取り組みがなされるのかとても楽しみにしています。

住民に見える、活かせる文化財行政であって欲しい

○議会への提言・疑問・質問などをお寄せください。

○今回の議会だよりで関心のある記事や感想があればお書きください。また、もっと読みたくなるような「アイディア」があればお寄せください。

県文化財保護指導委員
上田　公幸（ひろゆき）さん
（新）

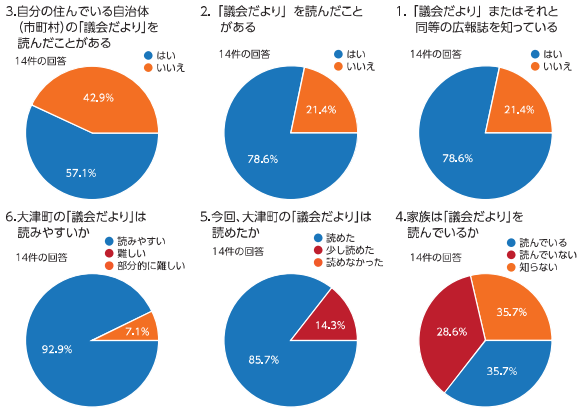
今回の議会で歴史文化財について質問があると聞き「文化財では飯が食えない、大津には参勤交代での宿泊は数回しかない」と公言された議員も過去にはおられました。いまだにこのような発言が行われている風潮があるはずもないと思い傍聴席に座らせてもらった次第でした。

今では議員構成も変わり老壮青で引き締まった運営に見え期待が膨らみました。町執行部も文化財調査研究から町づくりに活かしたい機運も感じられ今後も町・議会が議論伯仲する中に実のある町政が行われ、両者共にくれぐれも忖度など行わず自分の祖先・故郷を思う気持ちで誇りある文化財を保存し、調査研究と共に住民に見える、活かせる文化財行政であってほしいと思いました。

若者の視点

尚絅大学生によるレポート27

さる4月21日（木）に、尚絅大学九品寺キャンパスの新校舎にて大津町議会の広報委員3名と尚絅大学現代文化学部1年生の生徒14名とで意見交換会を行いました。学生の感想とアンケート結果（14名）をご紹介します。



身近な存在だと再認識した

1年　関（せき）　蒼依（あい）

今回、私は大津町議員の方との意見交換会の中で、議員になるまでの経緯やきっかけ、議員だからこその苦悩が印象に残った。三人の議員の方に議員になった経緯を伺ったが、そのうち二人は元々自分が議員になるとは考えていなかった。性別も年齢も異なる三人だが、議員を志した際に家族から反対されたというのは共通している。現在は少しずつ相互理解を深め、家族で協力しているというが、「巻き込んで欲しくない」「離婚する」と言われたこともあるという。それに加え、住民や支援者の支持を受けることへの責任も重くのしかかる。

今までは議員というと国会議員のイメージが強く、自分とは違う世界の存在だと感じていた。しかし、今回普段のお仕事の内容や議員になるまでの経緯などを伺い、私が考えていた以上に身近な存在だったのだと再認識した。議員になってよかったこととして感謝されることや人から頼られていることを挙げていたのも印象的だった。

投票は「権利ではなく義務」との思いで

1年　嵯峨（さが）　理心（りみ）

今回の意見交換会を通して、今まで抱いていた議員のイメージが少し変化した。まず、議員については漠然と「議会で色々なことを決めている人」というイメージを抱いていたが、細部までは想像が及ばなかった。お話を聞いて、実際には委員会を組織して政策の立案を分担していたり、町職員の方と協力して施策をしたりしていることを知れた。また、議会以外のところでもアクティブに活動されているのも印象的だった。

次に、当たり前のことかもしれないが、議員一人一人の考え方が少しずつ異なっていることも実感した。

近年では若者の投票率の低下が社会問題になっているが、お話に出てきた「投票は権利ではなく義務との思いで」という言葉を覚えておきたい。自分達の意思が最も反映されやすい投票という行為を放棄しておいて政治に文句を言うのは筋違いなので、自分の声を伝えられる機会は存分に活用しなければと思った。